

「真正の学び」を生み出すカリキュラム・マネジメント

—巨摩中学校における「科学と芸術の基礎」を教える実践—

* 吉 村 敏 之

Curriculum Management for creating 'authentic studies': teaching a basis of sciences and arts through the practice of Koma junior high school

YOSHIMURA Toshiyuki

要 旨

今年度(2020年度)から全面実施される学習指導要領において、教科固有の見方・考え方の形成が求められている。教科固有の見方・考え方は、学問・芸術の基礎となる「真正(authentic)の学び」によって培われる。「真正の学び」を生み出すカリキュラム・マネジメントを進めるにあたり、1960年後半から1970年代前半にかけて、山梨県巨摩中学校(当時:白根町立、現在:南アルプス市立白根巨摩中学校)で取り組まれた「科学と芸術の基礎」を培う授業の創造が指針となる。合唱の追求によって各教科の学習が「総合」された事実が、生徒の文章で示される。

Key words: 真正の学び、カリキュラム・マネジメント、巨摩中教育、科学と芸術の基礎、合唱指導

目次:

1. はじめに
2. 芸術教育の重視—全教科の「総合」
3. 歌唱の本質の追求
4. 自分の表現の追求
5. 全教科の「総合」としての合唱
6. おわりに—巨摩中学校の合唱から学ぶ

1. はじめに

新しい学習指導要領で求められる、教科固有の見方・考え方の育成には、学問・芸術の基となる「真正(authentic)の学び」が不可欠である。習得した知識・技能を働かせて探究を行い、探究の過程で新たな知識・技能を習得するサイクルの根底をなすものである。

「真正の学び」を生み出すカリキュラム・マネジメントを進めるにあたり、山梨県巨摩中学校(当時:白根町立、現在:南アルプス市立白根巨摩中学校)で取

り組まれた教科内容研究が確かな指針となる。「科学と芸術の基礎」を教える実践は「巨摩中教育」として全国から注目された。1964年、研究を先導する久保島信保が赴任すると、第1回公開研究会が実施(以後、1974年の12回まで継続)される。校則の強制による「生活指導」から、生徒の自律を促す「教科教育」の充実へと、教育の力点を方向転換する。生徒が「人間」として成長できる糧となる、教育内容の研究、教材の創造に力が注がれた。校内での研究に加えて、民間教育研究団体から学ぶ教師集団が形成された。遠山啓(数学)、白井春男(社会科)、林光(音楽)などの影響を強く受けた。合唱、作文、演劇などの表現活動が重視され、個性を生かし合う生徒の学習集団が形成された。

2. 芸術教育の重視—全教科の「総合」

「巨摩中教育」の特徴として、芸術教育の重視があげられる。研究を先導した久保島信保が美術担当であり、音楽担当の埴原美枝子が卓抜の合唱指導力を備え

* 教職大学院

ていたため、「芸術の基礎」が生徒に培われた。

1975年に、町長選をめぐる「政争」により、新しい町長が「巨摩中教育」を攻撃する。教育委員会の圧力で、予定されていた第13回公開研究会が中止された。翌年度からは教員の強制異動が行われ、1978年度には「巨摩中教育」が消滅した。1977年度には、校舎改築とともに「白根巨摩中学校」と校名変更され、「学校が消えた」事態となる。その後、「巨摩中教育」は、地元ではタブー視され、教育研究の対象となりにくい状況が続いた。2005年に刊行された、巨摩中学校卒業生の川村美紀氏（巨摩中学校1975年度入学、1年生で公開研究会中止を体験）による著作『地方公立学校でも「楽園」だった』でも、「巨摩中潰し」に焦点が当てられている。

「巨摩中教育」は消えたものの、「芸術の基礎」として力が注がれた合唱は、埴原に指導を受けた卒業生とその父母により、地域の文化として根づく。卒業生、当時の生徒の保護者が、現在、地域の団体で合唱に熱心に取り組む。また、巨摩中学校の卒業生が小・中学校の教員となり、合唱指導に力を入れている。

巨摩中学校では、合唱を含めた芸術教育が「全教科の総合」として位置づけられた。久保島のまとめた「巨摩中教育」の理念を示した論稿において、次のように記されている。

芸術教育の中心的課題は、実践論としてとらえる。もちろん、教材論をぬきにしては成立しないが、集団の質の高まりとの関連によって、表現の内容を決定するものと考ええる。

芸術教育であるから、文学、作文、音楽、美術、演劇などを中心とするが、全教科の総合として、あるいは、マスゲーム、フォークダンスのように、私たちの生活の中での美的感性、真実なる感情へのあこがれをはぐくむものとして実践している。

芸術教育をとりたてて考えるのは、とりわけ、芸術が、人間の問題を生きるということにかかわって提起していると思われるからである。芸術は、具体的に人生の諸断面を形象化してみせる。それは、過去から現在まで、人類の姿について、問題をなげかけている。

私たちは、学校に個性があり、性格があると考えれば、その資質を作り出すものは、総合的な芸術教育であると思っている。

集団の内容がどのようなものであるかは、芸術教育の実践が如何なるものであるかにかかっている。
※下線は、引用者による。以下の引用箇所についても同様。

学校教育で形成される集団の質は、芸術教育の質にかかっているとす。

音楽教育の基盤を「合唱」とする意義について、生徒の力を培った埴原は「自己表現」をあげている。

子どもに自己表現をさせる場合、笛やハーモニカを媒介として楽器で表現する方法もあるだろう。しかしものをいわぬ子どもが、ものをいえるために、口を開くためにも、また、もっとも率直に自己表現できるものは、自分の声をつかって歌うことではないか、それこそ微妙な感情表現ができるのではないか。ハーモニカもすぐ音がくるうし、笛もピッチがあわない。指のおさえ方ですぐ音が違ってくる。短い時間の中で、そうした技術を子どもがきちっと身につけることができ、その上に立って自分の心を思いきり表現できぬものだろうか。そうしたものをすべてきいて、歌によって音楽をわからせることが一番近道ではないかと考えた。ハーモニーする力を養い、連帯感を深めるために合唱を基調とするという考えにたつて先ず合唱の国、ロシア民謡の研究にかかった。その中から人間の素朴な感情にうったえ、音楽的にも美しいものはないかと探し求めた。

合唱の「基礎」を養う教材として、埴原は、ロシア民謡を取り上げた。合唱によって、自己を表現すること、さらに集団の表現を創ることが、すべての学習の基盤を培った。本稿では、合唱が「真正の学び」を実現した事実を、生徒の文章から示す。なお、合唱、その基となる独唱の学習について、その過程を記し、さらに自分自身の表現の質を省察する文章が書けること自体が、「真正の学び」である。

3. 歌唱の本質の追求

1976（昭和51）年度卒業生の藤井弘樹（1974年度入学）は、巨摩中学校時代の合唱で歌う喜びを体感し、声楽家を目指す。東京藝術大学に現役合格し、現在、

合唱指揮者として世界的に活躍している。巨摩中学校で芸術の基礎を学んだことが、専門家としての活躍につながったのである。

藤井は、中学校卒業時の全員自筆文集『こま 51』1977年に、合唱のあり方を考察し、「心の中の表現」ととらえている。

「巨摩中の合唱」

私が今まで歌ってきた歌。私はこの巨摩中学校の中にある、いろいろな歌を、みんなといっしょに、うたってきたが、どの歌にも言える、もっとも基本的な、ひとつの思想、とも言うべきものを持っていた。

それは、心、である。巨摩中の合唱というのは、うまく合唱を聞かせる、いうものではない。すばらしく、心の中を表現する、といった感じのものである。けっして人に見せるために歌っているのではない。どこかの合唱団や、クラブみたいなものなら、一種の、ショー的な、人に見せて、その目を引く、そんなふうな要素も、ふくまなければならないみたいであるが。

もし、私たちの合唱がそれをふくむようなものになったらどうだろう。毎朝、毎夕、ホームルームのわずかな時間に、わざわざだれも聞く人もいないのに歌ったりするだろうか。国語の授業をしているような、深い、詩の解釈をするだろうか。

むしろ、合唱団や、クラブのようなものの方が、それを合唱に含む必要があるのだろうか。たしかに、見る人におもしろ味、は感じさせることができるかもしれない。しかし、心から、自分の感情をこめて、いっしょうけんめい歌った方が、人を感動させることはできるのではないだろうか。

私は、巨摩中の合唱がいつまでも、けっして変わらないでほしい、とねがう。

独唱と合唱の違い、表現と技術の関係について考察を進める文章もある。

「独唱と合唱」

独唱と合唱、簡単に言えば、一人で歌うのとみんなまで歌うちがいののだが、おたがいにプラスの点、マイナスの点を含んでいるのである。

それらふたつは歌を歌うことには、かわりはないが、私たちが、実際にそれをやってみて、いろいろとそれに対してのことがでてくるのである。

独唱、これは、歌を自分ひとりで歌うように歌うことができる。したがって、ここをいちばん伝えたいんだ、という所とか、ここは悲しくするんだ、などの所を自分がかかってに表現し、作ることができる。細部の所の、こまかい表現なども、とつても出しやすい。が、ここまでは人に聞かせる、という歌にはならない、自分で満足する歌だけになってしまうのである。ここで強く、弱くと、自分の頭で自分の歌によう。自分ではうまくいったと思っているが。まわりの人は、しらけっぱなし、というような状態になってしまうのである。なぜだろう。ここで技術というのがでてくる。いくら自分で怒ったりしても、それは、どのようにすれば、人に伝えることができるのか。それができなければだめなのである。ここを悲しくしようとして、なきさけぶような感じで歌ってみる。たしかに人間の心の表現としてすなおで、いちばんの感情が表われている。しかし、その時それは歌ではなくなってしまうのだ。そして、かえって聞いている人に、オーバーだなあ、なんというへたくそな歌だ、などというような不快感を与えてしまうことになるのである。聞き手に感情の悲しみを、感動を、そのまま出してはいけないのである。歌い手は、感情の悲しみを、頭の中で作り、それを歌の悲しみにして出さなくてはならないのである。とてもむずかしいことである。私は前に独唱をした時、終わってから家の人たちに、歌に味がないなあ、あっさりしすぎているなあ、などと言われた。私はその歌に対して、歌う練習はほとんどしなくてもいい。感情表現が頭の中でねってあればいい、と思っていたのである。

合唱は、独唱とはだいぶ逆のことが言えるのである。一人に比べて、合唱は、低音から高音まで、専門の人たちがいる、つまりソプラノやバスのことである。またテナーやアルトもそれである。だから、ボリュームもあるし、低音から高音まで、きれいに声が出る。しかし、感情の表現について考えると、とてもむずかしいのである。みんながみんな、ひとつの歌に対して、同じ感情を持つはずがない。きよくたんに言えば、たとえば、Aが、悲しい感情

を持ったとする。しかし、Bは同じ歌なのに楽しい、という感情を持つこともあるわけである。いかにして、それをまとめあげ、一つの感情にそろわせるか、そこが、合唱を表現するにあたって、いちばんむずかしい点に思える。だれだれがうまく歌えるから、おれなんかどうでもかまわない、そんな考えを持つ人がいたならば、おそらく、合唱はうまくいかないだろう。合唱というのもの、個人が集まって、はじめてそれになるのである。

わがクラスも、同じようなことがよくある。ひとりの人の声がめだつからといって、その人に小さくするように言うてはだめである。むしろ、それは逆で、まわりの人がその人以上に声を出せばいいのである。わがクラスには、そういう、まちがった考え方をしているあまえんぼ、がたくさんいる。

1年生の合唱をきいて、心と技術を「一つのもの」と気づかされ、心の表現と技術との関係をさぐる。

「すばらしい合唱」

前に音楽室の黒板に、各クラスの合唱の点数が書いてあった。驚かされたのは、百点満点をとっている魔王である。私は、いったいどんな合唱なのだろう、と、たのしみにしていた。

合唱大会の日、次はいよいよその、1年3組である。ピアノが鳴り出した。合唱が始まった。その時、私は「なに?!」と、身をのり出した。みんなのどよめきが聞こえてくる。あたりまえであった。なんとも形容しがたい、大きな、はりつめた、緊張感のある声、顔をまっ赤にして歌っているその表情、それらのボリュームが一度に押しよせてきたのだから。私は、今までに、こういう合唱はほとんど聞いたことがなかった。うまい、上手な合唱ではなく、それは、すばらしい合唱だった。合唱のテクニック、うまさに感動したのではなくて、あの子たちのなんとも言えない表情、一生けんめいということばに置きかえられるような、あの声、あの合唱、それに感動したのである。

私は、今まで、歌だ、と言われる合唱をするには、心、と技術の二つを必要とする、と思っていた。が、あの子たちの合唱には心、の中に感情を表現する、技術があるのだ。私は、心と技術は二つの別々のも

のではなくて、一つのものではないだろうか、と考えさせられてしまった。

私達のクラスでは、合唱、いや、心の合唱をするためかどうかわからないが、詩を理解する意味で、読み、というのをやっているが、ほんとうはこれは、どちらに関係しているのだろうか。私には、これは、技術の合唱に関係しているように思える。なぜなら、ここは、こういう詩の気持が表わされているから、感情をこめると、まあこんなふうになっているからである。決して、ほんとうに、心で歌って、感情をこめているのではないように思える。つまり、読みをする時に感情をこめる、と言ってしまうてはだめなのである。ここは詩なんだから、歌ではどう表現する?と、みんなに聞かなくては。

さて、心は、テクニックや表現のいちばんのものとである。その心の中で最もものになるのは、歌を歌う、これだと私は思う。あたりまえのことである。しかし、ただ口を開け、声を出し、音程をつけ、感情表現を加え、そして、みんなに聞かせる。それでは、歌を歌っているとは言えない。これは、歌を製造しているのだと思う。レコードと同じである。

「歌おう。心をこめて、歌ってやる。うまく歌ってやる。みんなが感動するように歌ってやる。」

そんないきごみ。まず、それがあれば、いろいろなことに身が入る。決して、へたでこまるから、とか、どこどこに負けたくないとか、いろいろと言われるから、とそんな気持で歌ってほしくないと思う。1年3組の合唱には、今あげた、そのいきごみがあつたと思う。

私は、1年の合唱が、3年生のような、うまさ、の合唱でなくてよかった、と思う。また、私は、歌う。ということのむずかしさ、を、再び1年生の合唱によって、確認させられた。いや、確認することができた。「歌を歌う。」ということ、みんなは、どう考えているのだろうか。

4. 自分の表現の追求

中込千恵(1970年度入学)が中学2年生の時に書いた「『五木の子守歌』と私」という文章は、すぐれた作品として、日本作文の会編『作文と教育』1972(昭和47)年7月臨時増刊号「年刊 日本児童文詩集」に

収められた。1年生と2年生での「五木の子守歌」の独唱を創る学習について記したものである。集団による合唱の基礎となる個人の独唱の学習において、自分の表現を追求する過程がていねいに描かれている。

選評で「とにかく学習記録になり、自分がかくれてしまいがちになる題材を、学習したことを十分に自分のなかに消化し、自分という主体を表現している。」「きめこまかな心の動きを、じつによく書いている。」と、自分の心の動きを文章で表現している点が評価されている。「教科学習が、どのように人間づくりとかかわるのかということが、こうした具体的な作文を手がかりに解明されていかなければいけないであろう。」と、巨摩中教育で目指した「人間」形成につながる教科学習の質を示すものとされている。

まず、「五木の子守歌」の歌唱で表現したいことを、中込は次のように記している。

こじきにも似た生活をしてきた当時の農民の、悲しいさげびのようにも感じられて、この歌は「静かに訴えなければならない人間のさげびだ。」と私は思っています。美しい声で流してしまっただめだと思えます。ゆっくり語りかけ、感じ、考えてもらわなければならない歌なのです。卒業していった三年五組の合唱が、私にこのことを教えてくれました。はじめてこの歌を合唱で聞いたとき、なぜか、涙がうかばなければ聞き方が悪いのだというような気持ちにさせられてしまいました。そして、いっぺんで私はこの歌が好きになってしまったのです。

そして、感情を表現するための追求の過程が、詳細に描かれている。

家に帰ると、さっそくこたつの上に楽譜を広げ、ほおづえをついて、どうつくっていくかを考えてみました。

(まず、歌詞の意味だなあ)

“おいどんがうちんちゅうて、たがにゃくりゅきゃー”(“おいどんが“は”私が“でしょう。”うちんちゅうて“は”死んだとて“でしょう?)というふうに、一語一語、意味を考えていくと、三節全体の意味は一私が死んでも、誰もなくてくれないさ、うらの松山で、せみが鳴いてくれるだけだろう

さー。ということに解釈できました。(さあ、次は感情だけど……)(死んでも泣いてくれる人はいない、か。さびしいだろうな。私だったらそんなとき、やけっぱちになっちゃうけど、この人もそうかなあ。だとしたら、あきらめでしかない。”せみだけが鳴く“かあ、やっぱりこれも悲しみの”余いん“みたいなものを表わしているんだろうなあ。)

感情については、こんなふうを考えてみました。

今度は音楽をせめるのです。<>pfなどを、どこへつけていくかという仕事です。これは、今、よみとった詩の感情を表現していくために、よほどしんけんに考えなければなりません。

(山を一つ作ろう。そうするのがいいなあ。—私が死んだって—ここでやけになるとしたら、「くりゅきゃ」のところをもりあげるべきだ。よし「くりゅきゃ」は、クレッシェンドでいってffにし、デクレッシェンドにしていこう。それでいいかな、それじゃ「おいどんが—」は……。そうだ。語りでいこう。語りかけるように弱く、それはpという記号しか使えないけど、そのことは私の胸の中でじゅうぶん考えて感情を抑えて出していこう。そうだ、小さな音で、しかも気持ちとしては強く。「うらのまつやま」は<>でいいだろう。「せみが鳴く」は、弱いが、しつとりと、語りかけるようにして、ディミネンドしていく。)

こんなふうにして、音譜の上に、次のように書きこんでみました。

ここまでで、約一時間ぐらいかかったでしょうか。でも、まだ、ここで終わるわけにはいきません。歌いながら感情をどう表現するかの練習があります。しかし家の人もいるので、あまり大きな声で歌うこともできませんでした。声をおしころしながら、感情を出そうとつとめて歌ってみました。「おいどんが、うちんちゅうて、たがにゃあてくりゅきゃ……」でもだめでした。なぜかよくわからないけれど、しっくりいかないのです。楽譜を前に笛で歌い出しの音をとって、はじめからもう一度やってみました。

テレビの音が耳にはいつてくるので、両手で耳の穴をおさえながら、やっと自分にだけききとれるくらいの声でうたってみました。一生けんめいやっているつもりでしたが、自分の頭の中で考えたよう

には歌えないのです。何回も何回も、今度こそ、とくり返しました。

だんだんテレビの音が聞こえなくなりました。目をつぶって小さな声で、「おいどんが、うっちんちゆうて……」とうたいながら（誰も泣いてくれないんだ。誰も……。見すてられた自分なんだ。せみだけしか泣いてくれないんだ……。）と心にくり返すと、だんだん胸があつくなくなってきました。

（あーあ、やっとわかってきたぞ。これでいいんだ。この気持ちでいいんだ。自分の感情を入れることができた。）

その日はそれで終わりにして、胸のつかえがすっきりした気持ちで、ふとんにもぐりこみました。（おわった。やったんだ。あれでいい。）私はちょっとの間、興奮していて、ねむれませんでした。しかし、すぐねいってしまったようです。

続いて、公開研究会の授業で、多数の参観者を前にして、追求の成果を示す様子が記されている。

「あの、私は、ちょっと違って、“誰も泣いてくれない”っていうのを、やけっぱちな感じだと思ったから、“くりゅきゃ”を強くしてみたんだけど……。」

言っているうちに、顔がポーッとしてきました。赤くなっていくのが自分でもわかりました。口が、かわいていくようです。

「そう、じゃ千恵さん歌ってみて。」

「はい。」

と、返事はしたものの、たちまちからだ中が不安に包まれました。歌えるだろうか。ちゃんと感情が出せるだろうか。でも、あんなに練習したんだ。よし、やってみよう。私はゆっくりうたい出しました。ゆっくりしたテンポでないと、感情がじゅうぶんあらかわせないし、自分の心もおちつかないと思ったからです。歌っているうちに、あたりがシーンとしてきて、自分の声だけが音楽室に響いているような感じになりました。そして、私たちをとりまいていたおおぜいの人垣が、だんだん低く見えてきて、とっ

ても歌いやすくなりました。

“うらのまー”で声を大きくし、それだけが響いてきこえたとき、目がしらが熱くなって涙が出てき

そうになりました。最後の“せみがなーく”を弱く、ていねいにうたいあげたとき、私はとても感激していました。

いっせいにおこった拍手にわれに返り、（成功したのかな。）と思いました。

先生が、みんなに感想を聞いているなかに、「千恵さんが泣いているみたいだったから、こっちまで涙が出てきそうになっちゃった。」というのがありました。正直にいったととてもうれしかったです。ちょっと得意な気持ちさえありました。でもそれは、ほんのちょっとの間だったのです。先生から、「歌詞の内容をよくつかんで、その感情をびったりと歌いあげていたのは良かったね。惜しいことに高いところの音程がくずれたね。」と言われたとき（シマッタ！）と、頭をどかんとやられた思いでした。私は、感情の表現しか考えていなかったので、音がくるったことにはぜんぜん気がつきませんでした。それは一番高い音のところ、“うらのまー”の、ミの音がうわずってしまったことらしいのです。

見に来てくださった先生方の中でこんな注意をしてくださった方もいました。

「この授業は、たいへんいいと思いましたよ。先生の進め方も一。音楽の中から感情を中心に表現したやり方だと思います。でもね。一口に感情とは言っても、詩だけで受けとるのもいいんだけど、それに曲がついてるんだからね。曲について考えて歌わないといけませんよ。でも良かったです。独唱は一。やっぱり独唱は感情を出しやすいですねえ。ひとりだから。でも合唱は、まだ、だめみたいですね。」（そうか、詩の解釈だけじゃなくて、曲の方も考えなきゃいけないのか。）とまた教えられました。

今になって考えてみると、あのときはやっぱり、感情が先に立って、発声も音も、くるっていたような気がします。それよりも、表現しようとした感情の中に、自分のはいりこみすぎてしまったことが、音をくるわせたのかもしれないと思うようになりました。

感情が先走ってしまい、音程が狂ったことに、教師の指摘で気づく。さらに参観の教師から、歌詞の解釈とともに、曲の追求も必要なことを教えられる。感

情の表現と音楽との関係を考える。2年生になり、校内の合唱コンクールで再び独唱するが、うまくいかなかった。1年生の時のことをふりかえる。(あのときは、回りの人たちが、十分私の歌を吸いとってくれて、そうした自分たちの感情を歌っている私になげかけてくれた。歌い手と聞き手の感情の交流があったからこそ、あれだけ自分でも思いがけなかった感情が得られたんだらうなあ。)と。表現における歌い手と聞き手との間の感情の交流の必要性を思い知らされる。独唱を創る過程と自分の表現への省察を記した文章は、「私はこれからも、“五つ木の子守歌”を、自分の歌として、歌っていくことだろうと思います。」と結ばれている。

5. 全教科の「総合」としての合唱

巨摩中学校の5人の生徒が分担して書いたものをまとめた文章「学級合唱『母なるボルガを下りて』をつくるまで」(『中学校 現代の国語 1 新版』三省堂 昭和53(1978)年度版に掲載。初出は、日本作文の会『作文と教育』1975年7月号)は、巨摩中学校の合唱が各教科の学習の「総合」であることを示すものである。

合唱曲の「主題」にせまるために、「母なるボルガ」の意味を、地理、歴史、国語の面から調べ、表現すべき感情を明確にしていった。その過程が詳しく記されている。

歌には、主題というものがある。それがわからなくては、歌ったって何もわからない。そこで、この主題を見つけ出すために、イメージ作りなるものを行った。

まず、司会が言った。

「ええと、この歌の主題について何か。」

すると答える。

「ボルガ川のこと。」

また、それについても言う。

「もっとくわしく言え。」

「それよりボルガ川ってなんだ。」

「よし、ほんじゃ〈それでは〉わたしが調べてきてやらあ。」

というわけで、洋と浩二が図書館に調べに行った。その間、教室では、「ボルガ川の何を歌って

るのか」について話し合いを続けていた。しばらくして、洋と浩二が事典ごと持って来たので、司会がそれを読み上げた。

「ソビエト連邦、ヨーロッパ-ロシア地方の大河。ヨーロッパ最大の川で、長さ三千七百キロ。流域面積百三十八万平方キロ(ヨーロッパ-ロシア部分の三分の一に当たる。)初め、標高約三百二十メートルの、バルダイ丘陵から流れ落ち、オカ川を合わせてからは、右岸が高く、左岸が低地という特色をもつ。カマ川を合わせてからは下流の性質を持ち、河口に、長大な三角州を作って、カスピ海に流入して終わる……。」

そして読み終わると、そのことについて言い合うのだ。

「三千七百キロと言われても、イメージにならない。」

すると、「日本の長さはいくらだ。」という声が出た。と、ふだんから地理にくわしい茂一君が言った。

「待てよ、ええと、大体二千四百キロくらいじゃない?」

それで、ボルガ川の様子についてはわかった。

その様子のどんなところを歌っているかが問題だ。それを見つけるために、前に、音楽の先生に言われたことがあったので、歌詞だけでなく、曲想にもそって考えていくことにした。

基樹君が言った。

「ええと、『母なるボルガを下りて』というから、ボルガ川の上から下までの様子だと思う。だから初めは、曲想でも、出だしはバスだけで、次にテノール、女子と入ってくるように、水が少しずつ集まってくる様子を表しているの、上流は大きくないが、やがて大きくなって、バルダイ丘陵から流れ落ち、となっているんだから、そこから『あら波さか巻く』のところでもり上がる。ゆっくりとなってくるのは、カマ川を合わせてからの下流の性質を持つ、というところだ。」

それで、どこを歌のいちばんもり上がるころにするかがわかった。しかし、縮めると、こう短くまとめられるだけのことで、実際のイメージ作りは、そう簡単にはできなかった。何日も何日も時がかかった。一つの結論を出すまでに、いろいろの意見のぶつかり合いがあるからだ。実行委員でさえ、

予定が進まなくて、いらいらする。その上、調べるものが難しかったのだ。特に、「母なるボルガを下りて」の「母なる」がわからなかった。そんな時は、授業のための準備もあるし、クラブなどもあるので、朝早く来たり、昼休みを使ったり、放課後クラブのない人がやったりした。

「母なる」となぜそう言われるか。それは、前に一回、マチュシカーボルガのマチュシカが「母なる」の意味で、交通を便利にし、人々を結びつけてくれたから、とあげられたことがあった。しかし、みんな、それだけでは不満だった。(そんなささいなこと、「母なる」なんて呼ばれるものか。)と思ったからだ。例えば、「母なる新幹線」なんて聞かないし。

そこで、なぜ、「母なる」と言われたかが、また問題になり、

「水をあたえてくれたから。」

「作物がそこら辺でよく育ったから。」

という理由も考えて出し合った。しかし、実際としてどうかは、わからなかった。そこで調べ直すことになった。

この調べ方には、二種類あって、一つは、音楽の本で歌全体を調べる方法であり、もう一つは、事典でボルガ川から調べる方法だ。しかし、この場合、音楽の本には残念ながらひと言ものっていない。だが、事典には、長さが何メートル、運河がどうだ、ということしかのっていない。それで、ボルガ川という引き方がいけないんじゃないかと思い、「母なるボルガを下りて」という作品名、ボルガ川、マチュシカーボルガ、ソビエトを引いて、という調べ方を事典という事典に当てはめて調べてみた。またそうやっていくと、「このボルガ川はロシアの母という名で親しまれ。」と、新しい呼び名が出てきたりする。その名でまた、調べ返すのだ。その上、ソビエトの章には、新聞の活字ぐらいの大きさで、十ページほど書いてある。それを片っぱしから、どこにのっているかと読まなくてはいけない。

そんなことをやっているとき、ある日、うまいことに事典の総索引に、母なるボルガ—二十四巻××ページと出ていたのを見つけた。(これこそ天の助け)とばかりに、それと同じシリーズの二十四巻をさがした。しかし、ない。で、(だれかが借りたのかな。でも事典だから組で借りたんだろう。)と組

の貸し出しノートを端からめくり、そのシリーズのある組へととんで行った。(もし、家に持って行かれてたら、どこの家だろうと行ってやるぞ。)と言わんばかりだった。が、その組にあったのは違う本だった。

(古くなったので、しまっていてあるんだ。)と思って、図書館の先生に声をはずませて聞いてみた。

「先生、これの二十四巻ないでしょうか。」と、

「ええ、ないっさ。だれかが持ってってそれっきりさ。」

そう答えられ、がっくりきて、また頭にきて、(わたしが今度本を借りたら、絶対に期限の日までには、返すぞ!)と心にちかかったこともあった。

とにかく、そんなふうにして調べていくうちに、机の上や周りには、事典や、地理の本や、歴史の本でいっぱいになってしまうのだ。気がついた時には、外は暗くなっていて、六時を過ぎてしまう。そんな毎日だった。

また、それも、楽しみ(生きがい?)の一つだった。

それでもわからないので、音楽の先生にたずねたりもした。

で、わたしたちは、「母なる」とは、ロシアの歴史を育ててくれたり、稲を实らせ、あるいは魚をとらせ、もちろん、交通を便利にしてくれたりして、生活を豊かにしたので、愛着・尊敬の意味をこめて川をよぶことばだ、ということを知った。アムール川は、ロシアの境にあって、敵を来られなくするので、ロシアの父、と呼ばれる、ということも教わった。

この歌は、ボルガ川の上から下までの様子を、「あら波さか巻く」のところを、歌の山として、勇壮に歌い上げるのだが、その裏にある、母なると呼ばれるこの川への愛着・尊敬も、歌い上げなければならぬものだとも、わかったのだった。

「指揮」については、国語での文章の読解と音楽でのイメージ作りとの違いに気づき、「体で表現する」ことを意識する。

「母なるボルガを下りて」を学級でつくることに決まった時、指揮をしてみたいという立候補者が三人いた。三人とも、それぞれ表現のしかたが違うか

ら、その中からいちばんイメージにぴったりして、みんなが歌いやすい指揮者を選ぶのだ。だから初めはこわい気もしたけど、どうしても「母なるボルガを下りて」指揮をしたかったから、降りないで自分の力をぶっつけた。歌というものは最終的には指揮で決まると言う。だから、指揮者がつからない歌なんて、全然と言っていいほどり上がらないのだ。

わたしは、指揮者になった限り、みんな以上につくっていかうと決心した。

この歌は、非常に大きく、豊かに流れるボルガ川のことを歌っている。だから出だしを弱くして、順に大きく、強く、あらしのようになっていって、また静まる。こういうふうにご歌っていく中にも、ボルガ川の雄大さを歌わなければならないのだ。

わたしは、そういうふうにご歌ってもらうためには、どのように指揮をしたらよいか考えた。まず出だしは弱いからと言って、小さく歌ってしまったら、軽っぽくて豊かな流れでなくなってしまう。だから弱くても、だらだらしないように、重重しくふろう。そのためには、手先だけでなく、体を使って表現しよう。次の（豊かな流れ……）のバスから出るところは、初めの出だしより強くして、女子がそこへ出てくるからますます大きくなって、その調子で（あら波さか巻く……）へ持っていくたい。だからそこは、だんだん、だんだん大きくなっていかなければ、あら波がさか巻けない。そのためには指揮はどうしたらよいのだろう。バスの出るところは、最初より強くふって、女子の出るところは、手をいっぱいふって、両方の手と、体と、表情とで、なんとかやってみよう。そして（あら波さか巻く……）の男子だけのところはボルガ川がうねっているところだから、のび上がって、手をするどく回したり、表情をつけたりすれば、できるだろう。そしてさらに女子が入って来て、フォルテシモになる。ここまでは強いから、あまり流れるようにはふらなくてもよいが、次からは今度はまた、おだやかなるから流れるようにしなければならぬ。流れるようにふるのは、強いところより難しい。だって体をもっとやわらかくしなければ、手についていけないからだ。だからと言って、腕だけでなめらかさを表すのは無理だ。

初めは、なんとなく体を動かすのができなかつ

た。それはきっとわたしの心の中に、「はずかしい。」という気持ちがあったからだと思う。でも今では、はずかしいどころか、そういうふうにしない指揮のほうが見てておかしい。いつからこう思うようになったかわからない。しかし体を使えるようになるまでには、時間がかかったし、勇気も必要だったことは覚えている。そして毎日、鏡の前に立って練習したことも……。このようにしてわたしは（波間に……）というところがやっと思えるようになった。

最後のテノールが歌うところは、出だしのバスと同じように弱くても、しっかり歌わなければならない。だから強いところ以上に神経を使って、ていねいに指揮することに心がけた。

わたしは、この歌の指揮をして、体を使って指揮をするということはどういうことかを知った。例えば国語の時間、文学を読む時には、一つ一つのことば、一つ一つの文をたんねんに読んでいくことによって、そこに書かれている内容を自分の頭の中にイメージしていけば、読めたことになる。しかし、指揮はちょっとそれだけではできない。確かに、国語の時間のようにイメージを作る。それは歌詞や曲からどういうイメージかということを見つけ出す。しかしそれだけやったのでは指揮はできない。指揮者にとっていちばん重要なのは、頭の中に描いているイメージや主題を深く読み取っていなければできないし、また、いくら深く読み取っていても、それを体で自由に表現できなければなんにもならない。こういうことをわたしは、この「母なるボルガを下りて」の指揮をして初めて知った。

6. おわりに一巨摩中学校の合唱から学ぶ

巨摩中学校の合唱は、全教科の学習で得た知識・技能を総合して、表現するものであった。歌詞の解釈で文学の読解力や言語の知識が働き、歴史の知識を深めることになる。楽譜の構造をとらえるには、数学や理科の知識が要る。体育の学習が身体を楽器とする歌唱にいきる。さらに、歌唱による表現を追求する過程とそこでの心の動きを文章で書くことにより、合唱・独唱を創る方法を自覚し、省察し、習得できる。

また、教科の学習にとどまらず、学級を生活集団としても高め、実質のある生活指導にもつながった。生

涯を通して合唱を楽しむ卒業生が多く、「学びに向かう力」が形成されている。

巨摩中学校では、歌唱の追求が、音楽の枠を超えて、国語、地理、歴史、体育などの学習と結びつき、各教科が「総合」された。一方で、音楽の学習が他の教科と結びつくとともに、各教科の学習と関係づけながら、音楽の見方・考え方も着実に培われた。この事実は、各教科の学習を結び付けて生徒の資質・能力を伸ばす、カリキュラム・マネジメントの指針となる。

追求のしがいのある楽曲の選定といった教材研究、音楽の基礎的な知識・技能をわかりやすく教える指導方法の工夫、合唱に打ち込む集団の組織にむけた生徒への働きかけなど、教師の卓抜の指導力が「真正の学び」を生み出した。根底には、合唱の質の追求を超えて、合唱で自分を表現できる生徒の育成を目指した、教師の教育への熱意と豊かな知見がある。

参考文献

- 久保島信保「巨摩中の教育内容研究」『教育』No.235 1969年5月号
- 埴原美枝子「巨摩中の教育内容研究 その2」『教育』No.236 1969年6月号
- 久保島信保『ぼくたちの学校革命 山梨県巨摩中学校の記録』中公新書 1975年
- 川村美紀『地方公立校でも「楽園」だった』中公新書ラクレ 2005年
- 埴原美枝子「合唱の授業を創る」『「技」を磨き合える学校づくり』ぎょうせい 2006年
- 奈須正裕『「資質・能力」と学びのメカニズム』東洋館出版社 2017年

〈付記〉

- 本文中では、当時の巨摩中学校の関係者(教師、生徒、研究協力者など)について敬称略とした。
- 巨摩中学校の合唱指導を担った、埴原美枝子先生には、当時の貴重な資料の提供、当時の教育についての証言など、多大なお力添えをいただきました。心より感謝申し上げます。

(令和2年9月30日受理)